

“Let It Be” お言葉どおり、この身に成りますように

学院長 嶋田 順好

クリスマスのお出来事を中心人物は誰かと問われれば、即座に主イエス・キリストというお方の名前が出てきます。けれども、母マリアがいなければ、御子イエスはこの世にお生まれになることはなかったのです。今、マリアがいなければと言いましたが、もう少し正確に言えば、もし、マリアが天使の御告げを聴いて、信じ、受け入れなかったとすれば、御子イエスはお生まれにならなかったということです。

天使ガブリエルの伝えた神の言葉、「マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた。あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい」との御告げを聴かされた時、マリアは「どうして、そのようなことがありえますか。わたしは男の人を知りませんのに」と一旦は拒否しようとしています。人間としての知識や経験からすれば、そんなことは受け入れ難く、信じ難いのです。いやそんなことが起こっては困るのです。婚約者のヨセフとの愛は破綻し、人々の物笑いの種にされ、それどころか当時のユダヤの律法によれば、不倫の子を宿したとの嫌疑により石打の刑にあつて殺されても致し方のない事だったので（申命記 22・22-24）。

いくら天使の告げる神の御言葉だからと言って、マリアは抵抗しなかったに違いありません。下手すれば自分の一生を台無しにしかねない、大いなる危険を引き受けることになるからです。誰だって、自分の人生を棒に振るようなことはしたくないはずです。婚約者ヨセフとの間に夢見ていた、ささやかな幸せ。平凡ではあっても祝福に満ちた家庭。どうして私だけが、その夢を捨てなければならないのだろう。どうして、よりによってこのことが他の女性ではなく、この私に使命として与えられたのだろうか、と。

「私でなければならない理由はない。私だけ、自分だけが、危険に満ちた犠牲を払わなければならないなんて、何と不条理なことだろう。」マリアはそう思わなかったのでしょうか。マリアは、天使の御告げを無視し、踏みこむこともできたはず。そのための理屈ならいくらでも申し出ることができたことでしょう。しかし、もしマリアが、そうしていたなら、主イエスはお生まれにはなりません。つまり、クリスマスは始まらなかったのです。

マリアは、確かに一旦は天使の言葉を拒みかけました。あえて言えば、マリアの心のうちにも悪魔がささやきかけたのです。「天使の御言葉なんて信じるな。信じて何になる。お前の人生は、お前のものだ、お前が好きなように振る舞えばいいではないか。そうすれば何も犠牲を払わなくてすむではないか。」けれどもマリアは応答します。「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように」と。これがマリアの姿です。自己中心の思いを捨て、神の御旨のままに、神が良しとされる事が成るための器として自分を明け渡す。神が主であつて自分は神に仕えるはしためなのだと告白するのです。

“Let It Be” はビートルズの大ヒット曲ですが、実は、この歌詞は、ルカによる福音書 1 章 38 節の「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように」から採られています。この部分を英語の聖書では、“let it be to me according to your word”（RSV、NKJV）と訳しているのです。ジョン・レノンやポール・マッカートニーの意図を少し超えて、聖書の文脈に引き付けて意識すると以下のようなになるでしょうか。

わたしが人生に悩み苦しんでいる時、暗闇に閉ざされた時、失意のどん底に突き落とされた時、心を打ちのめされた人々が思いをひとつにすれば、答えはきっとみつかる。離れ離れになってしまっても再び出会うチャンスはまだ残されている。答えはきっとみつかるよ。夜空がどんより曇ってしまっても、わたしを照らす光がまだあつて、明日が来るまで照らし出してくれるから、母マリアが「お言葉どおり、この身に成りますように」と言つて、あえて主から託された使命を引き受けた、あの知恵の言葉が聞こえてくる。様々な試練に取り囲まれながらも、わたしもまたあのマリアの応答の言葉に支えられて、あるがまま主の御旨にこの身をゆだねるのだ。

わたしたちもまた、このマリアの主への信頼と一つになって、宮城学院に仕えてまいりましょう。